

令和元年度 学校総合体育大会兼全国高校総体サッカー大会 埼玉県予選 大会総評

報告者：高体連技術委員 南稜高校 横山晃一

6月8日から23日にかけて県内各会場において標記の大会が開催された。本大会は計52チーム【内訳は①関東大会県予選で8強に入ったチーム+②埼玉県S1・S2リーグに所属するチーム（Bチームを除く）+③各支部予選を勝ち抜いた26チーム】によるトーナメント形式で行われた。昨年度との大きな変更点は本戦へ出場することができる代表校が2校から1校に減少したことである。熾烈な代表争いの末に優勝を果たしたのは西武台。準優勝は聖望学園。ベスト4が武南・国際学院。ベスト8は埼玉栄・正智深谷・細田学園・埼玉平成となった。ここではまず決勝に勝ち上がった2チームの特徴と決勝戦での戦いぶりについて振り返り、続いて今大会全体の特徴と分けて述べたいと思う。

1 決勝戦（西武台 3 - 2 聖望学園）

ポジショナルプレー（ボールを保持しながらポジショニングで優位性を保って攻撃をする）を得意とする聖望学園は、1-4-3-3を採用し、CB2人が開き、両SBが中盤3人脇の高い位置を取って相手を押し込み、後ろから組み立てていく形を得意とする。GKも積極的にビルドアップに参加し、両CBとアンカーの4人で中央に数的優位な状況を作り出す。ショートパスだけではなくロングボールも狙っていて前線の3人はいずれも個で勝負が出来る。また前線のワイドトップの2人は大外に張るだけではなく状況に応じてインサイドのバイタルエリアに入ってきて周囲との連携で崩すこともできるので、多彩な攻撃を可能としていた。決勝まではいずれもボール支配率で相手を上回り、8得点無失点で勝ち上がってきた。まさに攻撃は最大の防御といえるチームである。

対する西武台は1-4-1-4-1のシステムを基調とし、状況に応じてアンカーがDFラインに入って5バックのような形をとる。攻撃時には中盤の4人が幅広くポジションをとって、サイドから仕掛ける場面が多い。攻撃のスイッチが入る特徴としてドリブルがあり、両ワイドがカットインしたところで①中央の選手が斜めの動きで背後を狙う、②逆サイドの選手が相手SBの裏の深い位置まで駆け上がってロングフィードを受ける、③仕掛けた同サイドのSBが後方からオーバーラップするという形を使い分けることが多かった。いずれも相手の背後のスペースを意識した攻撃が持ち味といえる。前線に人数を掛け、運動量も豊富なため、相手ライン背後への配給が跳ね返されてもセカンドボールの回収が出来たり、相手ボールとなっても前線でプレスをかけて再度ボールを奪取する回数が多かった。DF4人に関してはキャプテン②佐野と④関口の両CBが適確な指示を出しながら良い距離感を保っていた。1試合を通じてカバーリングがしっかりしていることが積極的にボールへのチャレンジを可能にしていた要因であったと言える。

決勝では聖望学園がこれまでとほぼ同様のスタイルで戦っていたのに対して、西武台は聖望学園に押し込まれると多彩な攻撃があることを警戒してか、ラインを下げすぎずコンパクトフィールドを形成して相手の組み立てを阻止するために前線から積極的なプレスをかけていた。攻撃時こそこれまでと同様のシステムであったが、守備時には1-4-4-1-1のような陣形を取っていた。1トップの⑨谷が聖望学園の開いたCBにアプローチをして規制をかけ、その後ろでインサイドハーフの⑦岩田が中盤少し前めのポジションを取り横での運動量を発揮してセカンドアプローチでサイドへ追いやる。中盤も連動してタイトなマーキングから激しく当たり、ミドルサードでボールを奪う。奪ってからはショートカウンターを仕掛ける。狙いは相手がポゼッションのために広がってる陣形が戻る前に空いているスパー

スであり、14分の先制点は両CBが戻りきらず開いているところを見逃さずMF⑧村田が中央裏のスペースへ浮き球を送って⑨谷が流し込んだものである。35分の2点目はカウンターからの得点ではないものの、相手ラインが高くなっているのを見て左サイドのMF⑩寺川がDFラインとGKの間に素晴らしいクロスを配給して生まれたものであった。

前線から積極的な守備を見せてきた西武台だったが、55分を過ぎたあたりから運動量が落ちてくると聖望は相手陣地へ押し込む得意な形をつくりながら攻撃の中心であるFW⑩塚田が立て続けにアシストをして同点に追いつく。しかし西武台は今大会を通じて行ってきた積極的な交代で活性化を図る。1失点直後にFW⑯細田を、同点にされた後の72分にはMF⑰村田と⑱高嶋を投入すると、直後の73分に左サイドから縦へ抜け出した⑯細田のクロスに⑨谷が3点目を決めて勝負を決定づけた。

紙一重となった好勝負であったが、その差となった要因を挙げるなら西武台が聖望学園対策として特化させた組織的な連動の守備を短期間のうちに仕上げてきたことと、それに伴う消耗戦を想定した積極的な選手起用が功を奏したことだと言える。また、今大会を通じて3回経験したPK戦で抜群の反応を見せたGK⑳高橋が控えているという精神面での心強さも自信をもって試合運びができた一因であろう。

2 大会全体を通して

4バックを採用しているチームが多く、上位に勝ち進んだチームは分業傾向の強いチームが多かった。サイドバックが幾度もライン際を駆け上がる、というような場面は少なめで、後ろを安定させることを最優先にしている様子が感じられた。中盤の選手に関してはスキルの高い選手が豊富におり、つなぎのパスや仕掛けの場面で光るプレーが随所に見られた一方で、ボール奪取の面で目を引く選手が少なかったことが気にかかる。その中でも全員がハードワークを怠らず、前線から連動した守備をした西武台が覇者となった点には注目したいところだ。

セットプレーに関しては守備の面でゾーンを敷いてくるチームが増加傾向にある。ニアストーンを2・3枚にしてゴールエリア付近にバランスよく配置するチームもあれば、GKの守備範囲に自信のあるチームはあえてゴールエリアの淵に選手を配置してゴールエリア内のボールをGKに任せる、という形をとるチームもあった。

今大会期間の後半（15日の3回戦～23日の決勝まで）を9日間で4試合戦う日程であったことが影響してか、どの試合でも積極的な選手交代策がとられた。試合の時間帯や翌日の試合などを視野に入れ、交代出場した選手をさらに交代するなど珍しい場面も幾度か見受けられた。

3 今大会を踏まえた今後の展望

新人戦・関東予選・今大会の3大会でいずれもベスト4に入っているのは今回決勝を戦った2チームであり安定した成績を見せている。しかし3大会全てでベスト8に入っているのはこの2つに正智深谷を加えた3チームのみである。新人戦でベスト8だったチームはすべて今回ベスト16以下で敗退しており、新人戦優勝の昌平は2回戦、関東大会出場を果たした浦和東も3回戦で姿を消している。現状を分析すると県内の上位勢力はかなり戦力が拮抗していると言える。今大会の準々決勝以降の7試合を見ても、全て1点差の試合（そのうち3試合は延長戦）であることも、それを裏付ける数字だと言える。それだけに夏を越えて今後の勢力図がどう変化していくか見どころである。

代表権を獲得した西武台は、7月25日から沖縄県で開催される全国高校総体に出場する。予選を終えてからの1か月でどこまでチームの課題を修正し、自分たちのストロングポイントを発揮できるか。埼玉県代表として輝かしい成績をあげてくれることを期待したい。